
編集後記

“生命”は神秘に満ちている。

使い古された言葉ではあるが、細胞 1 つから、それが集合して個を形成し、その個が集って社会を形成し…と、蛋白質に“生命”が吹き込まれることにより、無限の連鎖が出現する。

その“生命”を串刺しにして、心まで貫かれると“患い”となる。

“治”は河川の流れを人工的に調整することを、“癒”は心のしこりである病がくりぬいたようにぬけていく様を、それぞれ表している。

すなわち、河川のような気の流れを我々の手で調整し、心まで貫かれた串を取り去ることが、“患い”を“治”することであり、それによって“癒”えるのである。

しかし串刺しにされる“生命”は、神秘に満ちている。

どのようにして串刺しにされたのか、どのように串刺しにされているのか、本当に串刺しにされているのか、本当のところは謎だらけなのである。

西洋医学は、“生命”を分かる範囲で理解して学問化したが、それでは限界があるので EBM (evidence based medicine) の手法をとるようになった。

東洋医学は、“生命”を神秘のまま表現し学問化したが、時代の流れに押されて西洋医学の手法を真似るようになった。

ただ、いずれの手法も未だ正解を得ていない。

“生命”は未だ神秘のままである。

我々は、当たり前のこの事実を、真摯に、そして謙虚に受け止めて、日々の臨床に向き合う以外に道はない。

平成 29 年 12 月 18 日

日本東洋醫學研究會会長 松本 和久

日本東洋醫學研究會誌 2017 vol.3

編集・発行	日本東洋醫學研究會誌 編集委員会
発行日	平成 29 年 12 月 24 日
発行者	日本東洋醫學研究會
